城

小田原城 起源は、定かではないが1417年の室町時代の頃に、大森頼春（おおもりよりはる）が築城した城が起源ではないかとされている。大森頼春は、戦で功績を挙げて小田原城を与えられた。しかし、頼春の子、藤頼（ふじより）の代で、北条早雲（ほうじょうそううん）に城を乗っ取られ、その北条早雲が小田原城を難攻不落の大城に変貌させたと言われる。

DE-7

《難攻不落の逸話》

小田原城は、難攻不落で誰にも真っ向から攻め落とすことがことができなかった。1560年には上杉謙信、1569年には武田信玄、1590年には豊臣秀吉が攻めている。
豊臣秀吉によって落とされたが、策略で落とされたのであり、真っ向から攻めては落とせなかった。
小田原城址公園内で手頃な値段で体験できる甲冑と着物の着付は良い旅の思い出の1ページになる。

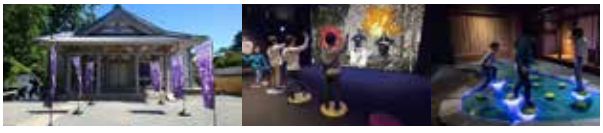
平成の大改修により、外装と共に展示が一新された小田原城天守閣。最上階のフロアには、一部江戸時代の天守が再現され、天守にあった摩利支天（まりしてん）像の安置所は、地域の木材と伝統工法を用いて制作された。

常盤木門SAMURAI館　E-8

武士の精神性や、武具の美術性にスポットを当てている、日本人観光客はもとより、外国人に人気を博している。

小田原城NINJA館　F-9

映像や展示とともに、参加・体験型の展示手法を採用し、子どもから外国人まで幅広い層が楽しめる施設。



小田原宿なりわい交流館

処

小田原宿なりわい交流館　昭和7年に建てられた旧網問屋を再整備。市民や観光客の「憩いの場」として、平成13年9月に開館。観光案内や街歩きの誰でも立ち寄れるお休みどころとして無料でご利用でき、2階のイベントスペースでは、現在、地場産業の情報発信や、生涯学習、文化活動などの各種イベント会場として、多くの市民や観光客が交流する場として利用できる。

小田原の典型的な商家の造りである「出桁(だしげた)造り」という建築方法が用いられている。

開館時間　／　観光案内・お休み処　1階　4～10月 10:00～19:00　11～3月 10:00～18:00

　　／　イベントスペース　2階　10:00～22:00

体

下記の日程では、ちょうちん手作り製作体験が行える。

小田原ちょうちんは、折りたたみ可能な蛇腹形が特徴的な提灯で、童謡「おさるのかごや」でも知られる提灯。

和紙にお好きな絵や文字を描き、竹ひごで作った骨組みに貼り付けてつくる。他にはないちょうちんとなっている。

小田原に来たお土産に、オリジナル提灯が定番になりつつある。

- ●開催日　毎月第2・4日曜日
- ●開催時間　10:00～16:00(受付は15:30まで)
- ●製作時間　90分
- ●費用　1,000円
- ●予約　予約不要　※10人以上の場合、事前予約が必要。
- ●会場　小田原宿なりわい交流館　TEL：0465-20-0515
  〒250-0012　神奈川県小田原市本町3-6-23

小田原宿場祭り

小田原宿場祭り

H-15

毎年秋に開催される小田原宿場祭りは、路上に敷かれた畳の上で純米酒が飲み比べと板わさ食べ比べが味わえるなんとも気っ風の良いイベント。回を重ねる度にファンを増やし、今ではかまぼこ通りの一大イベントとなっている。

イベント情報などは「小田原かまぼこ通り活性化協議会」のHPまたはFBページで随時更新されている。
東海道小田原宿にふさわしい景観整備を念頭に、かまぼこ通り内において使用される木材
は全て小田原材で、地元出身者のプロの手により調達され活かされている。勿論ギネス記録に挑戦したあのかまぼこの蒸し器も小田原材で製作され、後に乾燥させて山車小屋の壁
面整備に有効利用されたのだ。彼らは、地元の資源を磨き上げ未来の子たちに誇らしい地域であり続けることと、内外を魅了し続けられることで強い経済と暮らしの安定剤になろうとしているのだと語った。全部自分達の手で！と豪語するその姿をイベントのみならず、多くのシーンで目の当たりにすると、応援せずにはいられないと思うのは私だけであろうか。

さくら新酒めぐり

小田原かまぼこ通りにある『かまぼこ店』や『ひもの店』の各店舗で、神奈川県酒造組合の協力により、神奈川全13蔵より集まった日本酒を、試飲とおつまみ一緒に楽しめるイベント。各店舗でお土産も購入して食べ歩きができる。小田原では桜が咲く時期に開催となり満開に咲く桜と一緒に満喫できる。小田原城の桜は全国的にも有名なスポットとしても知られている。

年間9万人が訪れるかまぼこ通り。
旧東海道小田原宿の趣きを感じ、もっとたくさんの方に愛されるように、未来へ夢をふくらませ、地元の青年たちは景観形成にも余念がない。「未来へ繋げる構想を可視化し目標設定をする事が大切である」として2015年に制作された未来予想図。その取り組みは今も決してスピードを緩めることなく着実と実現されている。

全国初となる姉妹都市の下水道マンホール蓋の設置

戦国時代の北条三兄弟の氏政、氏照、氏邦の居城であったことから、姉妹都市盟約を結び交流を深めている小田原市・東京都八王子市・埼玉県寄居町は、下水道マンホール蓋（カラーデザインマンホール蓋）を交換した。小田原市内では「小田原かまぼこ通り」内に唯一設置さている。自動車の往来があるので、見学には十分気をつけたい。

「八王子市」

「寄居町」

「小田原・酒匂川」
歌川広重の東海道五十三次の小田原をモチーフに市内を流れる酒匂川と小田原城、箱根連山、霊峰富士をデザイン

小田原のマンホールカードが4種類に！

マンホールカードは、下水道広報プラットホームが企画・監修しているコレクションカードで、全国各地の様々なデザインの下水道マンホール蓋を詳しく紹介している。カードごとに指定された場所で、1人1枚、無料で配布している。
※現在、在庫切れとなっているものもある。

御幸の浜

明治6年（1873）、明治天皇と皇后がおそろいで、当海浜において、漁夫の地曳網をご覧になり、以来、「御幸の浜」と呼ばれるようになった。

ここはかつて船方村と呼ばれ、日々一万本を超えるブリが水揚げされ、漁師や篭屋（運び屋）の威勢のいい声が飛び交い、活気で溢れかえっていた。

砂浜から見える景色は変わりつつあるものの、沖合に臨む船の行き交いは今もなお健在。

小田原の歴史深さにも触れられる場所である。

多くの地元民に愛され、多くの旅人に絶賛される「御幸の浜」。

180度広がる相模湾の景色に癒されて欲しい。

小田原城から歩けば五分。

かまぼこ通りでビールと揚げかまを片手に散歩するのも贅沢かもしれない。

唄

小田原の松原神社氏子町内で受け継がれる、神輿の運行に「木遣り唄」は欠かすことができない。当地の神輿には木遣り師がいて、木遣りによって神輿を動かす。静止した神輿を前に木遣り師が木遣りを唄うと、担ぎ手はそれに合わせてハヤシを入れる。最後に木遣り師が唄い終わるか終わらないかの間合いで、担ぎ手は掛け声もろとも勢い良く走り出す。これは当地のかつての漁業者達が、網引唄(漁木遣り)で網を一斉に引き揚げる動作と符合する。

小田原の漁業者に伝わる網引唄がいわゆる漁木遣り。神輿渡御の木遣りとは若干の違いはあるが、仕事唄と儀式唄とを兼ねたものとして、全国的にも珍しいもの。その詞型は八・八の短調で、音頭を取る木遣り師の唄に合わせて網を引き揚げる。

＜木遣り師＞ソーリャァーセー
木遣りしゃ二分でも
＜漁夫＞(網をつかんで)ソラドットコセェー
＜木遣り師＞掛け声頼むぞ
＜漁夫＞ヨーイヤァ、ヨイトコセ、ヨイトコセ
(3節に分けて網を引く)

漁木遣りは過酷な重労働にリズムと活気を加えるのに優れた効果を発揮した。
掛け声の持つ「霊力」と担ぎ手の「気」が一体化し、大きなエネルギーとなり神輿を動かす。松原神社氏子町内の神輿の特徴である「静」と「動」を演出するのもこの神輿木遣。木遣り唄の語尾や節回しは地域によって、またそれぞれの木遣り師によって多少の違いがあり、一例をご紹介するに留めざるを得ない。

小田原囃子

山車の上で奏される道楽(みちがく)が祭囃子だが、小田原にも神奈川県無形民族文化財に指定された「小田原囃子（おだわらばやし）」がある。

小田原囃子は神奈川県下では最も古く、享保年間から宝暦年間にかけて下総葛西地方から伝わった「葛西ばやし(和歌ばやし)」が独自の発展を遂げたものと言われる。葛西ばやしは、京都祇園ばやしを伝習した神職・能勢環が創作したものを代官・伊奈半左衛門が広めたと言われ、これが江戸ばやしのルーツでもあり、小田原には葛西より直接伝えられたため、同じ神奈川県内でも江戸を経由して伝わった川崎・横浜のそれとは特徴を異にしている。

松原神社

I-14

小田原宿総鎮守である。御祭神は日本武命、素戔嗚命、宇迦之魂命。歴史をさかのぼると、近衛天皇の久安年間（１１４５年-１１５１年）の勧請と伝わるものの、創祀の時期は不明。北条氏が小田原を治めるようになると、社領を寄進するなど代々松原神社を崇敬した。その後、寛永9年（１６３２年）より稲葉氏、貞享3年（１６８６年）より大久保氏の領地となっても代々領主の松原神社 に対する尊崇の念は変わらなかった。例大祭は毎年5月3日から5日に開催され、大御輿をはじめ、各町から多くの御輿や山車が出され、小田原最大の祭りとして賑わう。山車で奏する小田原囃子は江戸葛西囃子の流れを汲むものとして、神奈川県無形文化財に指定されている。境内に古くは12社があったが、現在は住吉神社、鹿島神社、手置神社、稲荷神社、八幡神社の５社が祀られている。また、ご利益は、社運隆昌、心願成就、開運招福、勝運、学業・受験合格とされる。初詣をはじめ年間行事、神事には多くの参拝者で賑わい、今なお地元民に愛され続ける由緒正しき神社である。

【御神庫修景事業】
公益財団法人 東日本鉄道文化財団からの助成を受け、小田原かまぼこ通り活性化協議会、JR東日本、小田原市とで実施された事業で、松原神社の神輿を収納している御神庫の内部に窓つきの扉を設置して内部が見えるようして、扉の内側には写真とともに解説する説明板が整備された。かまぼこ通り周辺エリアの新たな観光スポットとなっている。

【漁師の万祝（まいわい）】
江戸時代から戦前にかけて、大漁を祝う漁師たちが参詣時に着た晴れ着「万祝（まいわい）」を制作。万祝は網元が絵師・染物屋に依頼して作る、長半纏を染め上げたもの。漁師たちが１年を共に生き抜いてきたことへの感謝や翌年の無事を祈る思いが凝縮されている。柄は黒潮を表す藍色。鶴や漁の様子などが描かれているものが多い。地域の人たちや観光客に見てもらえるよう、神社の境内に常設展示。

松原神社御神庫

松原神社神輿

万祝

松原神社

〒250-0012 小田原市本町2-10-16

魚がし山車

H-15

小田原には50台以上の山車(屋台)があると言われる。その多くは１階部分に出格子が取り付けられ、２階部分は数多くの丸提灯(ほおずき)で覆われる。そして格子状の屋根の前後に唐破風がしつらえてあり、その上には鬼板、下には懸漁が付けられているのが一般的だ。さらに様々な彫り物や真鍮の隅金具で飾られているのも多く見受けられる。山車の運行は現代の交通事情と電線との戦いで、行く先々で電線係が竹竿で電線を持ち上げながら進む。さらに最上部の鬼板は蝶番で根元から倒れるようになり、いざという時はこれを倒して進む。

例年５月３日から５日の３日間に渡って行われる松原神社例大祭。同祭では、魚がし（第23区）の神輿に鰤（ブリ）が飾られ渡御される。 二、三十年ほど前は景気が良く、同町では毎年のように近隣の魚屋などから鰤の寄付があった。そのため恒例のように神輿に飾り付けられており、山車にも取り付けられていたことも。しかし景気の悪化や神輿が傷むなどの理由から、鰤の飾りは姿を消していた。鰤の飾りの歴史は古いという説もあるが、同町内の祭りに関する資料は関東大震災の際に焼失してしまい、口伝で残されているのみ。正確にいつから神輿に取り付けられていたかは定かではない。また以前は千度小路龍宮なども鰤を飾っていたことがあったという。 鰤神輿の復活を望む声は町内で毎年挙がっていたが実現には至らなかった。しかし、近年会合内で「伝統や魚がしらしさを出し、人目を引くにはやはり鰤神輿をやろう」と決断。そして担ぎ手の中から相模湾で獲れた天然ものの鰤が寄付され、ついに鰤神輿が復活し見物客の注目の的となった。

神輿に取り付けられていた鰤は、宮入後には同町公民館目の前の海へと帰された。連休明けの７日、米神で鰤が1,000本水揚げされ、大漁旗が翻った。鰤を飾り海に帰したこととの因果関係は分からないが、本来松原神社例大祭は大漁祈願などを願う漁師の祭り。「ご利益だったらいいね」と同町の栗山茂男自治会長は笑って話している。

千度小路 龍宮神社

I-16

千度小路の一角に、ひっそりと佇む小さな神社がある。海の守り神、龍神様が奉られた龍宮神社。

北条氏に認められていた証が残っており、お社には、北条氏の家紋の三ッ鱗と、漁師たちの功績を称え波の模様を入れて納められている。千度小路の漁師たちは、ここで大漁や安全を願い海に出ていったそうだ。神社は相模湾の沖で漁をする様子をずっと見守り、時代は変わっても、龍神様は、千度小路の漁師たちの心のよりどころになっている。社殿の横に聳（そび）える松は、その形が竜が天に昇る様にも見えとても神秘的だ。

facebook https://www.facebook.com/odawarakamabokodouri/

WEBSITE https://www.odawarakamabokodori.com/

お問い合わせ:小田原かまぼこ通り活性化協議会　〒250-0012 小田原市本町3-7-17　印刷制作:(有)おむろアカデミー　印刷市場　TEL:050-3468-7281